

同志社大学

2011年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2012年 3月 15日提出

所 属	職 名	氏 名
経済学部	教授	清川 義友
研 究 題 目	マクロ経済政策研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>マクロ経済政策の望ましい政策運営の仕方を、ルールに基づく金融政策の一つであるテイラー・ルールを中心に研究した。今年度の研究の主たる狙いは、二つあった。一つはこの分野の研究が精力的に進められているニュー・ケインジアン・モデルでは、企業の投資が無視され家計の消費のみが重視されているが、これをケインズ経済学本来の姿である投資を考慮した形に直せないかということである。これについては、Journal of Money, Credit and Banking 掲載の B.T.Mccallum and E.Nelson(1999)論文が、十分ではないがある程度有用な議論を展開していることがわかった。</p> <p>もう一つは、従来閉鎖経済を前提にして行われてきたこの分野の研究を、開放経済に拡張することである。その理由は、自国の利子率は、変動為替レート制度の下では他国の利子率との関係で為替レートに影響するので、それが自国の経済に及ぼす影響も考慮する必要があるからである。この種の研究はまだ極めて数が少なく、Jpurnal of International Economics 掲載の L.E.O.Svensson(2000)論文や、Journal of International Money and Finance 掲載の G.Benigno and P.Benigno(2008)などに限られている。このうち Svensson の分析が、ある程度一般的なものを多く備えているので、これが研究に役立つことがわかった。</p> <p>またテイラー・ルールの一般的な研究を整理したものとしては、Federal Reserve Bank の Economic Quarterly 掲載の W.Kerr and R.G.King(1996)論文が簡潔にして要をえたものである。</p> <p>以上のようないくつかの先行研究やその他を踏まえ、開放経済の下でのテイラー・ルールのマクロ的な分析を、いくつかの前提の下で分析し、その結果を比較することが可能なモデルを、現在作成している段階である。</p>	